天平の甍

てんぴょうのいらか

死の波濤を越えて
遣唐使の青年達は
文明にたどりついた
再び帰れぬ故国のために
彼等は何を求めたのか
黄土の大地に
愛と情熱を埋めて
二十年が過ぎ去った

世界初の中国大ロケーション敢行！

原作■井上靖
（新潮文庫版・中央公論社刊）

熊井啓監督作品

中村嘉葎雄
大門正明
浜田光夫
草野大悟
藤真利子
高橋幸治
井川比佐志
吉田日出子
常田富士男
高峰三枝子
（特別出演）
田村高廣

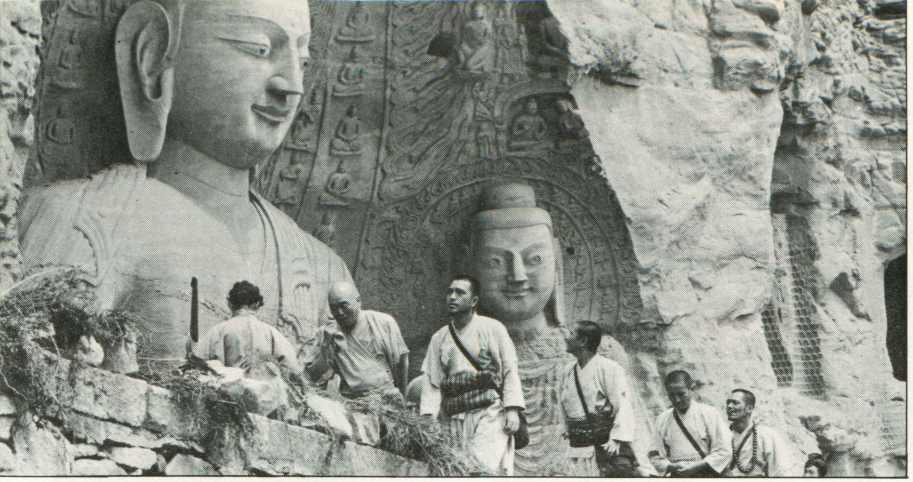
製作■「天平の甍」製作委員会
協力■日本中国文化交流協会
■株式会社東京放送
■東宝株式会社
上映協力■「天平の甍」
上映協力委員会
製作■佐藤一郎
■金原文雄
■磯野理
脚本■遠藤雅也
■依田義賢
配給■東宝株式会社

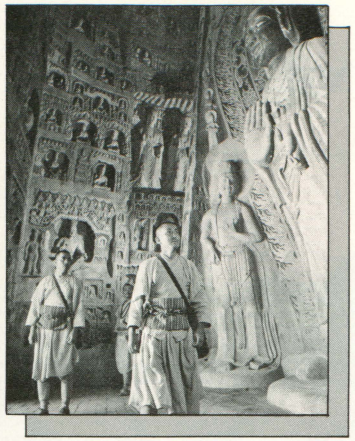
東宝

80年1月26日(土)先行ロードショー

千代田劇場 TEL 591－1716

テアトル銀座 TEL 561－7938





■物語

新中国での世界初のロケーションが実現した。名匠熊井啓監督の「天平の甍」がそれである。

この作品は文部大臣芸術選奨を受賞した井上靖の同名小説を映画化したもので、日中文化交流の原点ともいうべき千二百年前の遣唐使時代、荒れ狂う大海を渡り、広大な地でその青春とロマンを燃焼させた四人の若者、彼等と行動を共にし遂に失明しながらも日中の橋渡し役をはたした鑒真和上の姿をドラマティックに描きます。

華やかな唐文化と渡日までの全経路をくまなく描写するために、延べ三ケ月、一万数千キロに及ぶ大ロケーションを敢行する二時間四十分の超大作です。

原作■井上 靖（新潮文庫版 中央公論社刊）／熊井 啓監督作品

天平の甍

■中国ロケを訪問した井上靖さん。

●「天平の甍」製作委員会

委員長　今日出海
事務局長　佐藤一郎
委員　金原文雄
　　磯野理
　　熊井啓
　　依田義賢
　　井上靖

●スタッフ

製作　佐藤一郎
　　金原文雄
　　磯野理
　　遠藤雅也
原作　井上靖（中央公論社刊 新潮文庫版）
脚本　依田義賢
監督　熊井啓
撮影　姫田真左久
美術　木村威夫
録音　吉田庄太郎
照明　岩木保夫
音楽　武満徹
時代考証　林美一

●キャスト

普照　中村嘉律雄
栄叡　大門正明
玄朗　浜田光夫
融通　草野大悟
戒律　藤真利子
小業行　井川比佐志
平郡郎女　吉田日出子
景雲芳　常田富士男
阿倍仲麻呂　高橋幸治
与呂志女　高峰三枝子
鑒真　田村高廣

■解説

天平五年（734）の春、第9次遣唐船が筑紫を発った。一行は大使の多治比広成をはじめとする総勢五百八十余名にのぼり、四隻に夫々分乗した。この中には四人の若い僧侶が乗船していた。冷静沈着な普照、情熱家の栄叡、や、気の弱い玄朗、豪放磊落な戒融である。当時の日本にとって最大の課題は近代国家の成立であり、政治も文化も先進国唐から吸収するものがあまりにも多かった。普照は許婚者を棄ててまで唐に渡り、戒律（僧の生活綱領）を行うに相応しい高僧を渡日させる任務をおびていた。この頃の遣唐船は荒れ狂う大海を季節風にのり揚子江沿岸に漂着する方法をとっており、造船・航海技術の未熟さからすると大陸へ渡ること自体が奇跡であった。事実、130年余の間に8回の渡航が行われ、往復とも無事だったのは第8次遣唐船（717）のみ、つまり遣唐船に同乗できるのは名誉とひきかえに生命を捧げることであった。

普照一行もこれまでの例にもれず大暴風雨に襲われた。想像を絶する苛酷な自然との苦闘の末、船が蘇州沿岸に漂着したのは出航してから三ケ月、唐の都洛陽に入ったのは翌天平六年（735）であり、実に9ケ月を経ていた。

東西文明の出入口である洛陽は春たけなわ、牡丹の花が咲き誇り、宮殿の甍は光り輝いていた。四人の若者は悠久の大陸、華麗な唐文化に驚異と憧憬の眼をみはった。

普照等は渡日してくれる高僧をひたすら探し求めた。だが彼等が見たものは酒におぼれ落ちぶれた留学僧景雲、写経に一生を賭ける業行等で、夢とロマンを抱いて渡唐した若者の心は複雑であった。

日本を離れて7年の歳月がすぎ、故国からの便りひとつない日々が続いていた。探す人も見出せず、当時、玄宗皇帝の寵愛を一身に受けている阿倍仲麻呂にその仲介を頼んだが失敗に終った。

そんなある日、彼等は雲崗の大石窟の前に立っていた。岩山の壁面に刻みこまれた大小数万の石仏群、その生命感に満ちあふれ神秘的な世界に圧倒された。そこで奇しくも鑒真和上の高弟である道抗と知りあった。普照等の熱意にうたれ、早速揚州の大明寺へと向った。

民衆の間で名僧として強く慕われていた鑒真和上は、その時55才の高令に達していた。普照等の話に、その身を日本中国のかけ橋たるべく渡日を決意したが、この事は身の危険をかえりみず国禁を犯し、全ゆる苦難を負うことであった。天平十五年（743）、第一回の渡航計画の失敗以来、渡航が成功する天平勝宝六年（754）までの間に、実に五度の試みを為した。

歴史の波に流されてゆく人間の運命は様々。五年間も獄につながれた栄叡は病死、帰国の途中で海底に沈んだ業行、大陸を彷徨する戒融、唐に帰化するべく妻をめとり子を育てる玄朗……遂に鑒真和上の失明という最悪の状況の中で、日本を出発して二十年、志をはたし普照たゞひとり鑒真を伴って再び故国の土をふんだ。そして彼をひたすら支えてきたものはロマンへの強いあこがれ以外の何ものでもなかった。